

謹賀新年

本年も何卒よろしく
お願い申し上げます。

二〇一〇年元旦

われわれ自身をも含む世間一般の人々が、「何か変だ」と思い、呟いている。しかも、その「何か変」が自分に起因することを怪しまず、むしろ違和感なく「何か変」を行ない受け入れてしまっている。どうやら、われわれの世俗的な生き方が、時代の危うさの片棒を担いでいるらしい。

ある事柄の反対や否定を表わす一文字の接頭語がある。不機嫌・不可能の「不」を筆頭に、無関係・無神経の「無」、未解決・未勝利の「未」、反比例・反社会の「反」、非現実・非理性の「非」等々、長いリストが続く。だが、不・無・未・反・非などで時代や社会を悲観しても詮無いことだ。

逆説的に眺めてみた。するとどうだろう、忌むべきはずの接頭語を戴く術語が忽然と姿を現わすではないか。

不退転

「不」は絶望感を漂わせる接頭辞の君主だ。不義理、不親切、不確実、不条理、不自然、不正、不利、不便……もうよそう。尽きることはない。

だが、そんな「不」でもわれわれを見捨ててはいない。「不世出」という凄惨なことを示してくれる。数十年に一人という存在のことである。いや、これでは非現実的すぎて荷が重いか。ならば、不退転はどうだろう。怠らずに勤め、後ろに引き下がらない決意と覚悟なら、われわれにも分相応にできそうである。

無価

他の接頭辞とは異なり、「無」にあつてはプラスマイナスの意味が相半ばする。無知、無理、無駄などを戒める一方で、無双、無限、無病があるではないかと励ましてくれる。無我夢中の「無我」も捨てがたいが、ここはひとつ、無価という概念に心を惹かれてみよう。

言うまでもなく、無価は「価値がない」ことを意味してはいない。その逆の「プライスレス」、つまり評価を超越した価値のことである。一見する

と非力な概念だが、現代人の数字信奉熱を冷ます一服の良薬になってくれそう。

非常識

非の仲間に語である「非凡」がある。好感度の高い概念の地位にあるのは、平凡があまりにもだらしないからだろう。その平凡に比べると「常識」の地位は高く、それゆえそれを否定する「非常識」は長きにわたって世間の敵と見られてきた。

ところが、常識が疑われ厳しい検証を受けるようになった現在、肩身の狭かった非常識がようやく市民権を得るようになった。今日、「非常識な視点」は「柔軟なものの方」とほとんど同義になったようである。

難問

すらすらと解ける問題なら他の誰でもが解いてしまうだろう。それでは自慢にも何にもならない。解きがないの愚問も意表を衝かれそうな奇問も困るし、「なぜなぜ系」の問いに仕事上挑まねばならないのもつらい。したがって、われわれが解くべき問題は必然的に「難問」になってくる。

山積する難問の数々を前にして戦意を喪失している場

合ではない。難易にこだわることなく、また解ける自信の有無にかかわらず、問題を示されたことにひとまず幸せを感じるべきだろう。

未知

未完成や未決定、達成不十分を示す「未」。読み違えて脚光を浴びた未曾有は、事態次第でいい意味にも悪い意味にもなる。明るさを秘める「未」なら未来が一番だが、これとて手放しで期待するわけにはいかない。

ならば未知はどうか。知りえていないこと、はつきりしていないことは「可能性」でもありうる。未知には無知につきものの壁がない。「未知は道に通じる」——これはあながち肌寒い駄洒落ではないだろう。

反作用

「反」には三様の意味がある。おなじみは反逆や反抗など、「背く」という意味。次いで、反復・反芻が示す「繰返し」。そして三つ目が、反作用に見る「返す」という意味だ。

加えた力に対して同じ大きさの力が戻ってくるのが反作用。だが、自分に加えられる力に対して同じ大きさの力を返すリアクションこそが、反作用の真骨頂ではないか。す

なわち、他者の反作用を期待するのではなく、自分への作用を他者に「お返しする」という精神である。

少欲

上に対する下や、高に対する低と同じく、多に対する少、大に対する小が虐げられてきた。しかし、大欲を退けて少欲を説いた賢明な先人もいた。

ともすれば大欲を基準にしてしまうわれわれは、結局のところ飽くなき満足を目指してしまっている。少欲はちつぽけで惨めな生き方ではない。高い理想や強い希望という「句点」へ向かいつつも、生活や仕事のどこかで「これだよ」という、一息の「読点」を打つことなのである。

異彩

ともすれば皮相己を鼓舞して、不、無、非、難、未、反、少を冠する術語群に逆説の光を見出そうと試みた。最後の最後に「異端」でひねくれたり「異邦人」に変身したりするわけにはいかないだろう。

「異」という、正統でない意味合いの強い語が、別の語と結び付いて異彩を放つてくれる。多彩な色がひしめく中で小さな異彩は輝くだろうか。